



「100回とぶのが平気になった。」

休み明け、教室前の掲示板に掲示されていた詩の作文にあった一節です。昨年末あたりから冬季の体づくりのひとつとしてなわとびに取り組んでいますが、そのことについて初めて100回飛べた時のことを書いたものです。なわとびといえば12月の寒くなってきた時期になってからも、外で取り組んでいる子どもたちがいました。まさに「なわとびクラブ」が出来たかのように、毎日のように跳ぶ練習をしていました。純粋に跳ぶ回数を増やすことや早く飛べるように練習する子、交差跳びとか後ろ回し跳びなど新たな跳び方にチャレンジする子など、1人ひとり自分の今の目標に向かい、なわとびを回していました。

チャレンジといえば、2学期には体育館で一輪車に挑戦している子どもたちがいました。道徳の時間に読んだ一輪車に挑戦する話がきっかけだったようです。授業のあった昼休み、さっそく何人かの子どもたちが一輪車を携えて体育館にいました。その様子を見ていましたが、乗るどころか一輪車にまたがることに相当苦戦しているようでした。それからひと月ぐらい過ぎた頃だったと思います。体育館をのぞいてみると、一輪車の挑戦を続けている子どもたちを見かけました。驚いたのはその上達ぶりです。まだ壁伝いではあるものの一輪車を前に進めることができます。続ければいつか支えなしで乗れるようになるだろうと思われる安定感でした。

できなかったことができるようになったり、以前よりも上手にできるようになったりするときの達成感や嬉しさは、その先の新たな成長をしていく上で欠かすことのできない大切な経験です。休み明けから取り組んできた体育のスケートでは、多くの子どもがそういう気持ちを味わっていたように思います。はじめは、寒いし、足が痛いし、靴とか面倒だしという否定的な気持ちを抱いていた子もいたかも知れません。けれども取り組みを通し、少しずつ上手に滑れる経験を重ねていくうちに気持ちが肯定的なほうへと切り替わっていくようでした。記録会の後に書かれた感想文の中に『スケートが嫌いでしたが、頑張って練習してみるとこんなに楽しいんだなと思いました。』という言葉がありました。「嫌い」だったことを「好き」に変えられたことって、とっても素晴らしいことだと感じました。

このような経験のできる学習環境の力は大きいと感じます。スケートリンクの造成及び維持に対し運営委員会をはじめ保護者の皆様に並々ならぬご尽力を賜りましたこと深く感謝申し上げます。

気が付いたら平気になっていたことや苦手なことを好きになっていたこと。子どもたちにはそんな経験をたくさんたくさん重ねてほしいと思います。そして、経験の一つ一つを自信につなげ自分のものにできるよう、まわりの大人たちが「頑張っていたこと」を伝えてあげなければならないのだと思います。きっかけって大切なのだと感じます。褒めてもらったうれしい気持ちがやり続けようとする力に変わったり、やり続けることで好きになったり、得意なことになったりするように。

暦の上ではもうすぐ春の知らせ。じわりじわりと長くなる陽射し。根雪の隙間からのぞくアスファルト。寒さの和らぎが待ち遠しいこの頃。どうぞお体にご留意いただければと存じます。